



『城北校区』をたずねて

城北校区は姫路城の北部に位置する。ほとんどが住宅地であるが、校区内には県立姫路西高等学校、県立姫路工業高校をはじめ小中学校などが存在する文教地域である。西には大野川、東には船場川が流れる。西北には八丈岩山の北東に接する金山があり、その南端部の西・中部を芝崎山（八代山）、東部を東光寺山と呼んでいる。

古くから開発が進められ、八代山、東光寺山、船場川沿いで、旧石器時代から古墳時代に該当する遺物や遺跡が確認されている。その内、富士才遺跡、伊伝居遺跡、芝崎山古墳（1、2号墳）などの発掘調査が実施された。また、条里制の遺構も見られ、班田制の段別の名残と思われる字名「三反田」「四反田」「六反田」が伊伝居に残されている。

奈良時代には、『播磨国風土記』にみえる「播磨国飾磨郡因達里」に属した。その後、「因達里」は「印達郷」に変更された。平安時代末期には飾磨郡は飾西郡と飾東郡に分立、飾東郡の一部となる。荘園制の発達した時代は天皇領である「国衙庄内」にあったと考えられている。

戦国時代には、柴（芝）崎山構・千代山構・横須賀構が八代に、桑原構が伊伝居に存在したといわれている。また大永年中（1521～1527）には八代村の八代六郎左衛門、尾上十五郎、牧村八郎太夫、井出村の井出民部が惣社走馬に参加した（『播陽万宝智恵袋』上巻、『惣社走馬之記』）。さらに天正10年（1582）3月24日姫路惣社坪付帳に、いて井三郎次郎、いて井八郎衛門、いて井左衛門四郎、東光寺ノ太郎五郎などの名が「百四拾石ひらのゝあれ田」の作人として記載されている。（『姫路市史』史料編1、『射楯兵主神社文書』）

江戸時代には明治維新成立まで終始姫路藩領中嶋組に所属した。明治4年（1871）戸籍法が成立、それに基づいて実施された大区・小区制のもとでは第八大区・第八小区に所属した。明治14年（1881）頃、北八代村と南八代村が合併して八代村が成立した。明治22年（1889）、八代村・伊伝居村・山野井村・大野村・平野村・広嶺山の6カ村が合併して城北村が成立。はじめての役場が東光寺におかれた。明治29年（1896）、平安時代末期より分立していた飾東郡と飾西郡が合併再び飾磨郡が復活・飾磨郡城北村となったが、大正14年（1925）姫路市に編入された。

昭和時代に入り、昭和50年度から急速な住宅建設ブームが起こり、昭和51年～58年にかけて新しい町、八代緑ヶ丘町・八代宮前町・八代東光寺町・北八代1丁目・北八代2丁目・城北本町の6町が誕生した。この6町と大正14年（1925）以降姫路市の大字となった八代・伊伝居が今日の城北小学校区となっている。

八代大歳神社

八代山の麓に鎮座する。祭神は大年神・大山咋神（別名山末之主神）。

この神社は元禄8年（1695）現在地に移された南八代村の大歳社と、正徳6年（1716）榊原政邦が移した北八代村の大歳社を明治44年（1911）に合祀した神社である。境内には延宝8年（1680）南八代村の大歳社に姫路城主松平直矩が寄進した石鳥居の他、明治44年合祀記念の注連柱・大正14年合併記念碑などが存在する。社殿は昭和26年（1951）に焼失したが、昭和33年（1958）に再興された。



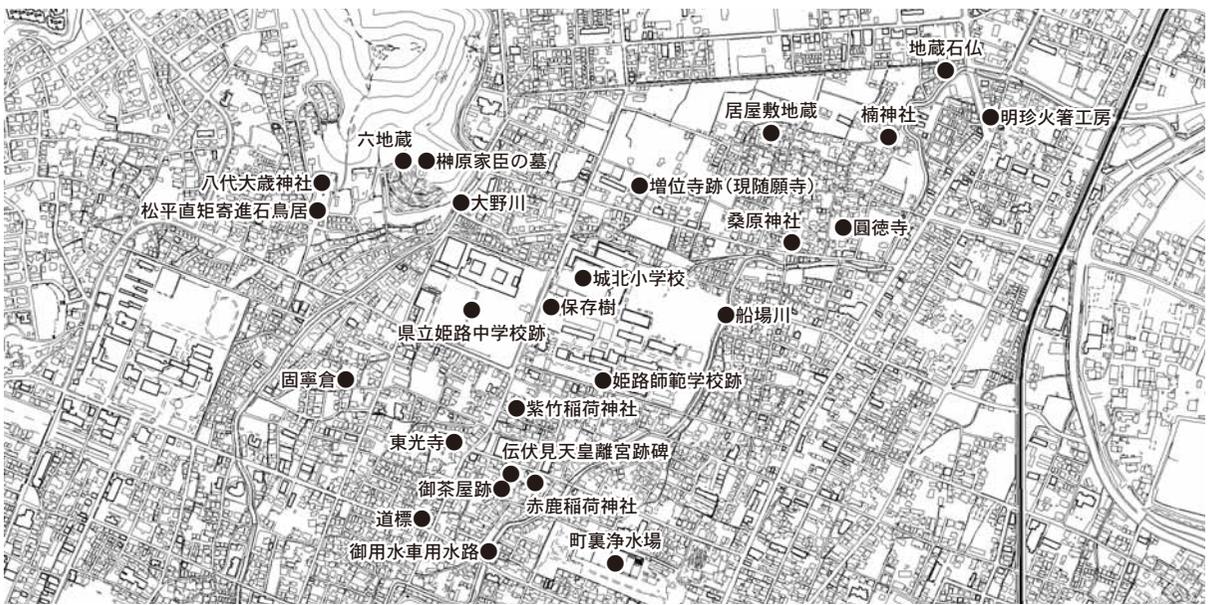
松平直矩寄進石鳥居

右柱「寄進石鳥居 播州飾東郡南八代大歳大明神廣前」、左柱「延寶八年庚申九月吉展姫路城主従四位下侍従兼大和守源朝臣直矩」の銘がある。直矩は延宝7年（1679）にも石鳥居を男山八幡宮に寄進している。

六地藏

昭和60年4月に造成された東光寺山霊苑に存在。正徳5年（1715）乙未卯月下旬に八代村が建立した。六地藏の型には諸説あるが、僧覚禅著『覚禅抄』では大定智悲地藏・大徳清浄地藏・大光明地藏・清浄無垢地藏・大清浄地藏・大堅固地藏を六地藏にあてている。





榊原家臣の墓

同じく東光寺山霊苑内に存在。姫路城主を歴任した榊原忠次・政房・政邦・政祐・政岑・政永の家臣及び家族の墓石が頂上にピラミッド型にまとめられている。榊原家が城主を歴任したのは、慶安2年(1649)～寛文5年(1665)と宝永元年(1704)～寛保元年(1741)。



大野川

校区の西を流れる。古くは妹背川・大野谷川とも呼ばれた。上大野に源を発し、男山の東で船場川に注入する。校区付近には稲荷橋・宮前橋・八代大橋が架設されている。



固寧倉扁額

安政6年(1859)北八代村に建てられた固寧倉の扁額は現在、北八代1丁目の住宅に保存されていると言われている。ケヤキ板で造られており、裏には朱漆で「安政六年蔵建、五人組頭喜十郎・同伊八郎・同嘉兵衛・庄屋宇兵衛」と書かれている。今は固寧倉は消滅し扁額だけが残されている。



道標

かつては八代東光寺町の南東角に存在したが、道路整備のため取り除かれた。この道標は現在、坂田町の妙行寺に保管されている。完読できないが、正面「書写山 法華山」、右「門松や…めいど」、左「広峯山 飾磨港」、「昭和八年六月」の文字が見える。



東光寺

山号瑠璃山、臨済宗妙心寺派、本尊薬師如来、元は八代御茶屋町にあった。創立年代は不詳であるが、永仁年間(1293～1298)伏見天皇草創、当寺を離宮(皇居)にしたといわれている。中興は法燈国師、その後赤松円心が再興したと『播磨鑑』に見える。文明16年(1484)に山名氏の攻撃を受け焼失した。慶長8年(1603)池田輝政は敗壊を嘆き、現在地に東光寺を再建した。飛地境内には梅ヶ谷地藏堂がある。



梅ヶ谷地藏仏

堂内の地藏は千年の古作といわれ、多くの人々の信仰を受けている。中央に延命地藏、右に子授地藏、左に知恵地藏を安置している。堂内の石段下に「播磨十水」の一つに数えられている「御所の清水」がある。元弘3年(1333)後醍醐天皇が隠岐島から御還幸の途次、書写山円教寺参詣の道すがらこの清水で口を潤されたことから「御所の清水」と名づけられた。後醍醐天皇600年を記念して昭和9年(1934)に歌碑が建てられた。清水の背後にある歌碑には

『いにしゑの すへらき君の 水くめは
こゝろすゝしや 空もすゝしや』

とある。



県立姫路中学校跡（県立姫路西高等学校）

明治11年（1878）景福寺の坊舎で開校したが、明治16年（1883）国府寺町に移転。明治42年（1909）現在地に移された。その後、昭和23年（1948）県立姫路西高等学校に引き継がれた。卒業生に和辻哲郎・三上参次・阿部知二らがいる。往時を偲んで、卒業生の栗田肅夫作詞の「鷺山に秋の」の詩碑が昭和41年8月14日に県立姫路西高等学校の校庭に建立された。詩碑の揮毫は栗田肅夫、碑の裏の撰文は空地純一である。



城北小学校

明治20年（1887）開校した伝世小学校を明治24年（1891）に廃し、その跡地に城北小学校が開校した（伊伝居師範前町）。その後、明治30年（1897）現在地に移転した。昭和17年（1942）城西小学校が、昭和45年（1970）広峰小学校が、昭和57年（1982）城乾小学校が、それぞれ城北小学校から分離。平成22年、創立120周年を迎えている。



保存樹

昭和46年（1971）12月23日制定の姫路市自然保護条例によって指定された保存樹。種類はクスノキ。昭和49年（1974）2月10日に指定される。指定番号42。



姫路師範学校跡（県立姫路工業高等学校）

明治34年（1901）開校。初代校長は野口援太郎。教育に情熱を傾け「理想の教師づくり」を目指し、日本のペスタロッチと賞される。昭和11年（1936）廃校。跡地には県立姫路工業高等学校が建てられている。校庭内に往時を偲んで「馳懐石」（明治37年）・「野口援太郎先生之碑」（昭和17年）・「兵庫県姫路師範学校跡」（昭和43年）の三基の碑が建てられている。



増位寺跡（現随願寺）

随願寺はもと増位寺といわれ伊伝居に存在した。聖徳太子が伽藍を造営し、高麗僧惠便を住ませたのが寺の始まりとされている。天平年間（729～748）に行基が金堂を建て薬師如来を安置したという。その後、元徳元年（1329）水難により現在地に移された。城北第二公園内を増位寺跡と推定して平成18年に石碑が建てられた。



桑原神社

祭神は伊弉那美命・中筒男命、摂社は智鯉鮒神社・猿田彦神社・青木稻荷神社。かつて桑原明神・井出中筒男社・住吉神社などの名で呼ばれてきた。創立年代は不明であるが、『播磨明神記』によれば田原大修崇祠といい、時代は天徳年中（957～960）としている。嘉禄元年（1225）に雨乞いの行事が行われ、3日間雨が降りつづいたという記録が残っている。社殿は昭和20年の空襲で焼失したが、昭和33年に再興された。「明和元甲申十二月」（1764）の銘入りの狛犬のほか、享保3年（1718）の「桑原大明神 播州飾東郡大野之江出井」銘の石燈籠などがある。



圓徳寺

山号鶴林山、真宗大谷派寺院、本尊は阿弥陀如来。明応5年（1496）に智源が開基。慶安3年（1650）に智顕が本堂を再建。その時から鶴林山圓徳寺と称した。その時同時に船場本徳寺の末寺となった。嘉永7年（1854）銘入りの手水鉢、宝暦4年（1754）の鬼瓦がある。



居屋敷地蔵

身の丈98cm、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ地蔵立像。元増位山にあったが、明治時代初期に現在地に運ばれてきた。移設するとき像の方から身をまかせ若者が背負って運んだとか。力士増位川が手車で運んだとも言われている。昭和61年に堂を改築。西に記念碑を建てる。境内には御利益10項目の掲示板を掲げている。他に明治34年（1901）の手洗鉢がある。18軒の講で世話。



楠神社

祭神は宇迦之御魂神。昔から「伊伝居のお稲荷さん」「若宮さん」と呼ばれて親しまれてきた。8軒の講で世話。桑原神社境内の「青木稻荷神社」はこの講が世話をしている。またこの神社では昔子供の奉納相撲が行われていたという（『姫路の神社』）。毎年4月に初午祭が開かれる。



明珍火箸工房

近衛天皇から明珍家を賜った明珍家の火箸工房。千利休の依頼により茶室用の火箸を製作したのがその始まりとされている。種類は実に20種類もあり、触れ合う音が鈴虫の鳴き声に似ているとのことで、明治天皇・志賀直哉など著名人からも愛でられた。型としてはツクシ型・ワラビ型・カワラクギ型などがある。現当主52代明珍宗理は、火箸の他に火箸を組み合わせた風鈴や、ドアチャイム・花器のほか創作楽器「明潤琴」を作成している。中でも「明潤琴」は平成14年のワールドカップでその音色が披露された。多くの音楽家からも注目されている。



地藏石仏

昭和46年船場川から発見された地藏仏を祭祀している。場所は軍人橋西の船場川北岸。



紫竹稲荷神社

祭神は宇迦之御魂之神。以前は「大將軍の森」→「芝竹稲荷」→「紫竹稲荷社」と名を変えた。寛保2年(1742)の北八代村明細帳には「大將軍の森」の名がみられる(『ふるさと八代』)。腫物を治す神として信仰され、願う時は油あげを、治癒すると豆腐をそなえたという。また徴兵免れにもご利益があったとされている。最近は癌封じの宮の看板がみられる。社殿は平成19年に修復された。境内には明治6年(1873)の手水鉢・明治28年(1895)の石燈籠などがある。



赤鹿稲荷神社

祭神は倉稲魂命、迎具土之大神。『姫路の神社』によれば応仁元年(1467)妻鹿城4代城主妻鹿貞祐の第3子定頼が赤鹿家を創始して赤鹿稲荷神社を祭祀し、「赤鹿の森」・「赤鹿大明神」と称え尊崇したという。また『城郭研究年報5』には安政年間の御茶屋の絵図がみられるが、それには「赤鹿森社」御神体赤松円心・妻鹿孫三郎長宗・赤松則廣としている。社殿の改築は、明和7年(1770)・慶応2年(1866)・昭和7年・平成20年におこなわれた。境内には万延元年(1860)の手水鉢・明治23年(1890)の線香立てなどが存在する。分霊が北条口にある。



船場川

元は妹背川・大川・三和川などと呼ばれてきた。本多忠政が元和年間(1615～1623)にこの川を改修してから船場川と呼ばれるようになった。保城で市川と分かれ播磨灘に注入する。かつて高瀬船が上下した。船着場が八代本町2丁目に残っている。また改修記念碑が小利木町の東、清水橋の近くにある。校区内には、軍人橋、新井出橋、伊伝居橋、酒飲橋などが架設されている。



御茶屋跡

池田輝政が慶長8年(1603)の東光寺を現在地に移し造営した別荘。今はその面影はないが、昭和の初期まで池や土手がみられたという。『城郭研究年報5』や「姫陽秘鑑」には御茶屋の絵図がみられる。姫路城主が代々利用したが、延享3年(1746)に暴風雨のため崩壊した。その後宝暦元年(1751)頃に酒井忠恭によって廃止された。榊原忠次がこの御茶屋で詠じたといわれる「八代八景」の一首に「暁の寝覚めをさそふ 鐘の音は 近くも遠く 行心かな」があるが、東光寺のことを詠じたのであろう。



御用水車用水路

米の粉・種油を絞るために宝暦12年(1762)に完成した水車を御用水車という。水車は姿を消したが、用水路が八代御茶屋町に残っている。

伝伏見天皇離宮跡碑

伏見天皇が離宮にした場所に昭和5年(1930)に建てられた。矢内正夫(播磨史談会長)撰文でこの地に離宮を建てた由来が漢文調で書かれている。



町裏浄水場

大正14年(1925)に行われた野里小学校校舎増築工事中に発見された湧水がきっかけとなって昭和4年(1929)に竣工された。ポンプアップして同年完成の男山配水池に送水している。敷地内には旧事務所、沈殿池節制室が当時のまま残されている。昭和60年5月27日に近代水道百選に選ばれた。



■編集 松岡 秀樹
(姫路市文化財嘱託調査員)